

Cell Glioblastoma を経験した。臨床症状・画像所見については、特徴的所見は認められなかった。免疫組織学的検討では α_1 -antitrypsin が巨細胞において陽性であり、本細胞が貪食能を持つ可能性が示唆された。また2例において、GFAP 陽性であり、巨細胞が glial origin である可能性があり、今後の検索に何らかの糸口を与えるものであると考えられた。

C-2-1) Steroid 投与にて画像上興味ある変化を呈した Glioblastoma の1例

関 薫・安孫子 尚 (国立仙台病院)
片倉 隆一・桜井 芳明 (脳神経外科)

今回我々は Steroid 療法にて画像上腫瘍陰影が著明に縮小した Glioblastoma の1例を経験したので報告する。

症例は68歳の女性で、頭部 CT にて右側頭一頭頂部に不規則な ring enhanced mass を認め入院となった。腫瘍摘出後、放射線、化学療法を行ない、画像上腫瘍陰影は消失し退院となった。しかし、退院3カ月後に歩行障害、尿失禁、見当識障害が出現、頭部 CT 上、腫瘍摘出部周辺と両側側脳室前角近傍に enhanced mass を認め再入院となった。入院後、腫瘍周辺の脳浮腫軽減目的で、デカドロン 24 mg/day の投与を開始したところ、症状軽減に伴い三週間後の頭部 CT で、腫瘍陰影の著明な縮小が認められた。本例のように steroid 投与のみで、再発 Glioblastoma の腫瘍陰影が著明に変化した例は稀で、興味ある症例と思われたので報告する。

C-2-2) 軽微な外傷により急性硬膜下血腫、脳内血腫で発症した Glioblastoma の1例

染矢 滋 (辰口芳珠記念病院脳神経外科)

頭蓋内腫瘍による硬膜下血腫は稀であるが、最近、我々は、軽微な外傷による急性硬膜下血腫、脳内血腫で発症した、Glioblastoma の1例を経験したので報告する。症例は、55才男性。夫婦げんかにて、妻に後頭部を平手で叩打された後に頭痛、嘔吐があり当科へ搬送された。神経学的には、傾眠状態以外異常所見を認めなかった。頭部単純写では異常なし。頭部 CT スキャンにて、左急性硬膜下血腫、左側頭葉内血腫を認めた。出血性素因はなかった。左前頭側頭開頭に硬膜下血腫の除去を施行した。術後の脳血管撮影では、脳動静脈奇形は認められなかった。挫傷脳を組織学的に検索すると、Glioblastoma

であった。残存する腫瘍、脳内血腫を摘出し、オンマヤバルブに接続したバスケットチューブを留置し、ACNU の局注と放射線治療を施行した。Glioblastoma が軽微な外傷で急性硬膜下血腫、脳内血腫で発症した報告は少なく、脳動静脈奇形との鑑別も重要と思われた。

C-2-3) 経時的 Follow-up で脳室内結節の腫瘍化を見た結節性硬化症の1例

佐藤 直也・立木 光 (岩手医科大学)
日高 徹雄・金谷 春之 (脳神経外科)
高野 長邦 (岩手医科大学)
小児科

CT, MRI による経時的 follow-up 中に、脳室内結節が急速に増大、腫瘍化し、閉塞性水頭症の発生前に腫瘍摘出術を施行した結節性硬化症の1症例を報告する。患児は5歳男児で、生後6ヵ月に点頭癲癇が出現し、皮脂腺腫、皮膚白斑、脳室上衣下の calcified nodule および non-calcified nodule が確認され結節性硬化症を疑われた。その後 CT による follow-up が行われていたが、知能発達障害も明瞭となり、5歳時の follow-up CT にて右側脳室前角の Monroe 孔近くにあった non-calcified nodule の著明な増大を見た。造影 CT にて、著明な均一の増強効果を示したため、脳室内腫瘍の発症と考え、水頭症発現前に腫瘍摘出術を施行した。病理診断は subependymal giant cell astrocytoma であった。結節性硬化症は hamartoma とされる結節が本症例の如く腫瘍化時に手術対象となる場合がある。従って、経時的 follow-up の重要性和 CT, MRI 所見を合わせ報告する。

C-2-4) von Hippel Lindau 病に合併した小脳橋角部悪性脈絡叢乳頭腫の1例

高橋 秀和・佐藤 光夫
山野辺邦美・渡辺善一郎 (福島県立医科大学)
山尾 展正・児玉南海雄 (脳神経外科)

von Hippel Lindau 病に小脳橋角部悪性脈絡叢乳頭腫を併発した1例を経験したので報告する。症例は60才男性。左耳鳴・難聴及び頭痛を主訴に来院、神経学的には左 VII ~ X 脳神経麻痺及び左小脳症状を認め、眼科にて右網膜血管腫を指摘された。CT にて錐体骨破壊を伴う左小脳橋角部腫瘍及び左小脳半球腫瘍を認めた。1年6ヶ月後に水頭症を来し V-P shunt を施行したが、経過中に左小脳の腫瘍性出血を来し死亡した。剖検にて左小脳橋角部に悪性脈絡叢乳頭腫と左小脳血管芽腫を